

平成 24 年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名

在宅で生活している脊髄損傷者の栄養・食生活の評価に関する検討

学位の種類： 修士（健康科学）

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻

ヘルスプロモーションサイエンス学域

学修番号 11899611

氏 名：秦 希久子

（指導教員名：稲山 貴代）

【目的】

在宅で生活している脊髄損傷者（以下、在宅脊髄損傷者）の食生活について、プリシード・プロシードモデルの枠組みに基づき、包括的に評価し、支援のあり方を考究することを目的とする。

【調査方法】

脊髄損傷者当事者が運営する（社）全国脊髄損傷者団体連合会会員を対象に質問紙調査を実施した。登録会員 2,731 名のうち、1,000 名の回答を得た。調査票の枠組みは、生活の質（QOL）、健康状態、食物摂取状況、食行動、中間要因、準備・強化要因、食環境、属性とした。

【研究課題 1: 食生活の包括的評価】

対象者の平均年齢は男性 61.7 (SD 11.4) 歳、女性 57.7 (SD 13.6) 歳、受傷後経過年数は男性 27.6 (SD 12.8) 年、女性 26.9 (SD 15.2) 年であった。健常者の先行研究と比較して、食生活全般は良好であった。一方、男性よりは女性、若年者よりは高齢者に良好な回答が多くみられ、受傷後、男女に関わらず早い時期からの健康行動への介入の必要性が示唆された。リハビリテーションの場で問題となる損傷部位差はほとんどみられなかったことから、在宅脊髄損傷者への食生活支援は、損傷レベルに応じることが要求されるリハビリテーションとは異なる可能性が高いと考える。

【研究課題 2: 食生活満足度に関連する食物摂取状況・行動・食環境の要因】

多変量ロジスティック回帰分析で食関連 QOL と食生活要因との関連をみた。食物摂取状況との関連では、“緑黄色野菜（オッズ比 2.07 倍）”、“いも類（1.56 倍）”、行動との関連では“自分の健康のために栄養や食事について気をつけているか（2.55 倍）”、“家族や仲間と食事や料理、栄養の事を話すか（2.05 倍）”、“健康診断受診の有無（1.50 倍）”、食環境との関連では“健康づくりに家族や周囲の人は協力的か（4.97 倍）”、“食生活について一緒に考える仲間の有無（1.75 倍）”、“よく利用する食料品店や外食店で栄養バランスの良い食品やメニューを得ているか（1.55 倍）”が抽出された。食生活満足度には、周囲の人との関わり、積極的な自己管理、具体的な食事構成では副菜が関連することが示唆された。

【研究課題 3: 健康度自己評価に関連する食物摂取状況・行動・食環境の要因】

多変量ロジスティック回帰分析で QOL と食生活要因との関連をみた。食物摂取状況とは関連がみられなかった。行動との関連では“家族や仲間と食事や料理、栄養の事を話すか（1.51 倍）”、“排便時間規則性（1.75 倍）”、食環境との関連では“健康づくりに家族や周囲の人は協力的か（1.74 倍）”、“よく利用する食料品店や外食店で栄養バランスの良い食品やメニューを得ているか（1.53 倍）”が抽出された。健康度自己評価には、周囲の人との関わり、積極的な自己管理が関連することが示唆された。脊髄損傷者は排泄機能障害があることから、排便が QOL と関わると予測したが、両者の関係を明らかにした調査研究は少なく、貴重な結果であると考え。研究課題 2 と 3 の違いは、健康度自己評価（QOL）と食関連 QOL の特性は異なることを示唆したものと考える。